

授業改善に向けた校内研修の工夫

柳井市立柳井南中学校

はじめに

本校の研修に取り組む基本姿勢は3点ある。

その第一は、研修と日常的な教育活動を一体のものとしてとらえて取り組んでいるということである。つまり、「研究のための研究」とせず、どこまでも「実践的な研究」を貫こうとしていることである。さらに、授業改善とともに、教育活動全体の充実をめざしており、研究が終わった後も継続的な取組を前提としてきた。

第二は、P D C Aのサイクルを活用し、改善の必要が明確になった場合には、研修体制であれ研修方法であれ「より良く変えることには躊躇しない」という姿勢である。実際に本年度途中にも部会の改編や部会員の異動等を行ってきた。



第三は、全校的に研修を推進していくために、率直に批判し合い支援し合える教職員の和や雰囲気的大事にしてきた点である。特別に支援を要する生徒に対する指導のサポート、ベテラン教員からのアドバイス、気軽に相談し合える雰囲気づくり等が、少なからず生徒への教育効果をより大きなものに行っていると感じている。

推進体制の工夫 ～全員で推進していく体制に～

「授業改善」を進めるにあたっての本校の特徴は、学習を深める上で欠かせない、互いに高め合おうとする学級・学校集団づくりを含めた幅広い取組についても研究を進めていることである。

2年間の研究において、1年目は研修の方向を見極める年、2年目はそれを踏まえ、実践をしていく年と位置付けた。推進体制については、1年目は核となる推進チーム（校長・教頭・研修・教務）が研修の推進にあたった。研究分野が広がった2年目は、全員がより積極的に研修にかかわる体制づくりとして「授業づくり部会」「集団づくり部会」「心の教育部会」の3部会を設け、それぞれのリーダーが研修を推進する体制をとった。各部のリーダーは、部員の教職員とともに実践内容について検討・改善を行うなど、全教職員で取組を進めた。

研修内容の工夫① ～より多くの研修の機会をもち、継続的な指導を得る～

すべての教科で授業改善に取り組んでいるとはいえ、全教科の授業研究の時間を生み出すことは難しいのが現状である。しかし、全教職員が授業力を上げるためには、より多くの研修の機会をもつ必要がある。そこで、本校では、参観については空き時間の教員を対

象とするなど、日頃から授業公開ができる体制づくりを進めた。

また、学力向上に向けての取組がより実効性のあるものになるよう先進校のよいと思われる事例を積極的に取り入れている。他府県の中学校を視察したり、近隣高校に研修に行ったりして、個別指導の手だて、家庭学習の仕方、授業評価など様々な実践に取り組んでいる。実態に合わず、手直しも必要になることもあるが、本校の実態に合うものにするために教員の意見、生徒の評価などを参考にしながら改善を重ねている。



授業公開（「おいでませ授業」）

さらに、柳井市教育委員会の指導主事に1年を通じて指導を受けるなど、研修の方向や方策については外部の評価を得るように努めている。研究授業における指導案検討会、研究授業及び研究協議はもとより、可能な限り研修職員会にも参加を求め、継続的な指導による授業改善を進めた。

研修内容の工夫② ～すべての教科で共通の「授業の構造」を～

「確かな学力」の育成に向けた授業改善では、生き生きした生徒の活動のある授業づくりをねらいとしている。そのために、「学習意欲が高められる授業」、「生徒の学び合いがある授業」を意識し、すべての教科で共通の構造をもつ授業実践に取り組んだ。

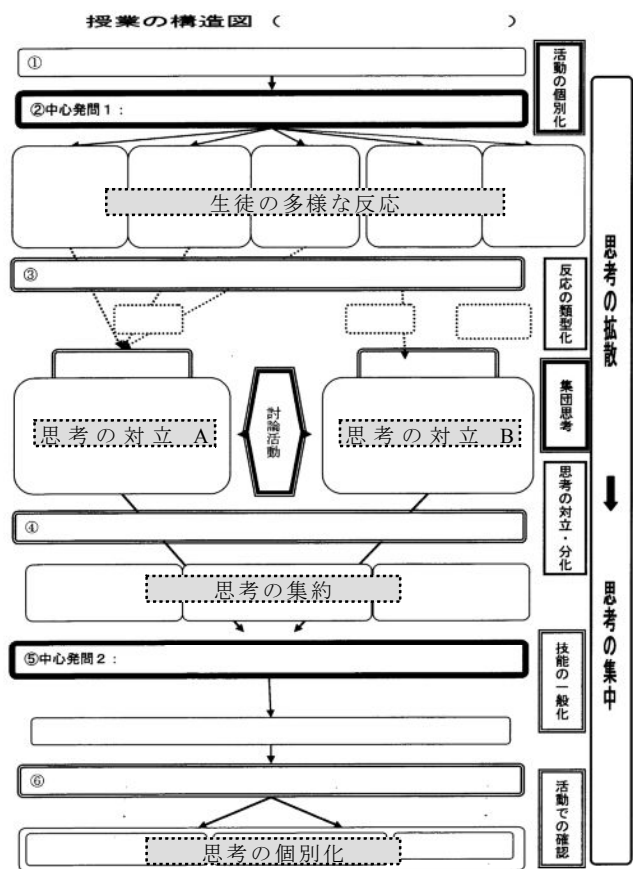
どの教科においても、「生徒の意見の絡み合いがある」「拡げた思考を集中させる発問を位置付ける」などについて工夫することにより、生徒が意欲的に考え、力を高める授業づくりに取り組むことにしたのである。

また、研究授業もこの構造図（右図）の視点で協議を行い、他教科の担当であっても積極的に意見を交換し、授業の流れや学習の深まりについて互いに検証し合うことができた。

おわりに

中学校では、教科担任制ということもあお互いの授業を見合った時に、共通の視点をもつことが難しい。

共通の授業構造を示すことは、生徒の思考に目を向けることになり、授業づくりや授業評価を進めるための意見交換をする上でも、よい方法であると考えられる。



【授業の構造図】